

宮澤賢治

——病氣・文学・宗教

目次

- 一、宮澤賢治の詩「岩手病院」について
- 二、宮澤賢治と鈴木梅太郎
——病氣をめぐる文学と科学
- 三、宮澤賢治と小岩井農場
- 四、宮澤賢治入門
——宗教と性
- 五、宮澤賢治と岩手医大

黒澤 勉

一、宮澤賢治の詩「岩手病院」について

昭和五十三年六月八日、本学創立五十周年を記念して、医学部玄関脇に宮澤賢治の詩「岩手病院」の詩碑が建立され、除幕式が行われた。詩の題となっている「岩手病院」とは、三田俊次郎先生が、明治三十年（一八九七年）四月二十日に開設した私立岩手病院のことである。三田先生はその後、明治三十四年（一九〇一）に岩手医学校を設立したものの、医療制度の改革によって明治四十五年には廃校を余儀なくされた。しかし、昭和三年（一九二八年）岩手医学専門学校として再度認可を受け、その初代校長となられたのである。その後敗戦による学制の改革があり、現在の大学として設立されたのは昭和二十二年のことである。三田先生は貧困の極にあったこの東北に病院を開設し、しかも「医術は済生（＝命を救う）の根本」との信念のもとに医学生の育成に情熱を傾けた。それは、分野こそ異なれ、困窮に喘ぐ人々を救いたいという願いにおいて宮澤賢治と相通うものがあつたと思われる。

賢治が私立岩手病院に入院したのは大正三年（一九一四年）四月のことである（院長は三田先生で、学校は廃校となっていたものの研究心旺盛な空気は残っていたようである）。この年三月、国語・作文・博物などは得意としたものの数学・体操は落第点で、成績中クラス、操行も「丙」の、山好き、坊主好きの一風変わった少年として盛岡中学を卒業した賢治は、以前から悪かった鼻（肥厚性鼻炎）の手術を受けた。しかし、高熱が続き発疹チフスの疑い（実は結核の初感染ではないかともいわれている）がもたれて五月末ごろまで入院することになった。

「岩手病院」の詩は満十七才のこの時の体験をもとにして書かれたものだが、詩として作られたのは二十年後（三十七才）のことである。十五才の時から作り始めていた短歌を材料としてあらたに文語詩として作り直したのであ

る。「大正三年四月」の日付のもとに百五十首近くの歌が歌稿として残されている。

この詩は「文語詩稿五十篇」（他の多くの作品同様、生前未発表であった）の見出しのもとに五十枚五十篇の定稿用紙に記されたものの一篇で、表紙には「文語詩稿五十篇 本稿集むる所、想は定まりて表現未だ足らざれども現在は現在の推敲を以て定稿とす 昭和八年八月十五日」と記されている。（賢治が亡くなったのはこの年の九月二十一日のことである）

昭和六年九月二十一日東京で発熱、一度は死を覚悟して遺書を書いた賢治は、故郷に帰り健康の回復を願う気持ちと同時に余命いくばくもないという思いを抱きながら病床の人となっていた。死の意識は生涯への回想へと人々を向かわせる。病床にあつて立ち上がることでできない賢治は多感な、悩み多い青春を詩によつて生き直していたのかもしれない。恋の悩み、進路の悩み、両親との葛藤などを素材とした詩は回想というよりも、その悩みの渦中にある者の声であり、若々しい情熱すら感じられる。

詩「岩手病院」は「文語詩稿五十篇」の原稿をみる限り、題がついていない。賢治はこれを定稿とする意識があったことはまちがいないが、五十篇のうち三十二篇までが題をつけていない。おそらく今少しの生が与えられたならすべての詩に題をつけていたに違いない。そしてこの詩に「岩手病院」と題したことはまちがいないであろう。なぜなら下書の別な原稿用紙をみると冒頭に「月緒しゴビの砂塵によるといふ」とあり、そこに斜線が施されて「岩手病院」と大きな字で記されているからである。その下書の原稿の全文を次に引いてみる。

「葉桜の梢のかなた／血のいろにうちゆがみつ、／今宵また月のはりぬ／患者たち廊のはづれに／うちつどひうちひしめき／まがごとの兆と云へり

ああされどきみはことなく／朗らかに赤酒を煮たり

月しろは鉛糖のごと／柱影は廊にならびて／かなしくも綿羊はなき／いそがしく過ぐるひとあり

ああされど きみはえまひて／フラスコを守る」

鉛筆書きで記されたこの下書の原稿は鉛筆で、赤インクで、藍インクでと三度にわたって推敲され、さらに裏面にも二度にわたって、詩句の一部が記され、それにまた手が加えられている。

下書原稿も参考にして詩「岩手病院」をわかりやすく解釈してみよう。

第一連―（ゴビ砂漠の砂塵のためと言われる）血の色をした歪んだ月が今夜もまた葉桜のむこうから上ってきた。（ここ岩手病院に入院している）患者たちは廊下のはずれに立ってそれをみて互いに何か不吉な出来事の前兆ではないかと語りあっている。

第二連―木々におおわれて物の区別もつかない暗い闇の中を、細い声で鳴きながら行きつ戻りつしている（実験用として関係者が）熱を植えた黒いヒツジの姿がおぼろげに見えるが、それはいかにも不気味に感じられることだ。

第三連―（赤い）月は鉛糖（＝酢酸鉛）のよう（に、白く色を変え）柱の立ち並ぶ長い（病院）の廊下を渡っていくと、コカイン（＝コカの葉に含まれるアルカロイド。無色無臭の結晶で胃痛や百日咳、喘息に内服し局所麻酔に用いた）の白くかおるような中を、忙しげに通り過ぎていく医師の姿が見える。

第四連―（このように暗い病院の中にあつて）それでもなお、うら若い看護婦達はみな、忍耐強く、ほほえみながら、（患者達の体温計の）水銀の目盛りを数え、（熱冷ましのための）輝くばかりの氷を割って（仕事に励んでいる）。

（注「綿羊」と「コカイン」については化学科の力丸教授に御教示頂いた。記して感謝申し上げます）

以上のようにこの詩は暗い病院―患者の不安な気持ち、不吉な月、黒い綿羊、コカイン……の中にあつて、け

なげに明るく働いている看護婦に対する思慕、憧れを述べたものである。「春のをとめら」と複数の看護婦になっているが、下書原稿を見ると「ああされどきみはことなく朗らかに赤酒を煮たり」「ああされどきみはえまひてフラスコを守る」とあって、もともとは特定の女性を意識していたことがわかる。推敲によって看護婦達の姿に対する共感という形にしたわけだが、「文語詩稿五十篇」をみると、その特定の女性に対する情熱的な恋心を述べた詩があり、相思相愛の仲であったと思われる詩もある。また「文語詩稿ノート」というこの詩の創作メモの中にも「四月 卒業 ヤム」「入院」「かの人もし思はざらば我も苦しくあらざらんを」「木村とふたたび見る」「退院いざや起てら…」と続く詩句は若々しく明るい言葉であり、この詩は見方によっては医療に従事する人々を励ます詩としても読めないわけではない。

そればかりではない。この詩に歌われた出来事から二十年後、病いの中にあつて、「諸苦を抜くの大医王たれ」と自らを鼓舞し「東二病氣ノコドモアレバ行ッテ看病シテヤリ」「南二死ニサウナ人アレバ行ッテコハガラナクテモイイトイヒ」などと手帳に記した賢治の思想と生涯は医療の道に志すものにとって、単なる「入院記念」以上の深い意味をもっていると感じられてならないのである。

（本稿は岩手医科大学父兄会報「啐啄」第二十五号、平成七年に寄せたものである）

二、宮澤賢治と鈴木梅太郎——病気をめぐる文学と科学——

I

宮澤賢治の童話に「北守將軍と三人兄弟の医者」（昭和六年七月、雑誌「児童文学」に発表）という、奇想天外・荒唐無稽な誠にユーモラスな明るい作品がある。物語はソンバークという將軍が北方の塞を守って首都ラユーに勇ましく凱旋した時に始まる。將軍は三十年もの長い間、十万の軍勢を率い砂漠で過ごしたが、その間、一度も馬から下りることがなかった。そのためにズボンは鞍にくっつき、鞍は馬にくっついて、王に謁見しようにも氣の毒に馬から降りることすらできない。まさに文字通り「人馬一体」となってしまったわけである。そればかりではない。兜は頭からはずれず、顔や手には灰色をした不思議なものが一面に生えている。この灰色のものは植物で、砂漠のどこにも生える所がなかったため人間の顔や手に生えたもので、兵士達も同じような状態だったという。將軍は困ってしまつてこれらの奇病（？）を三人兄弟の医者に見てもらった。初め、リンパー先生に兜をはずし、頭を直してもらふ（將軍は二百と二百をあわせると三百六十だと答えたりして「頭の目もふさがつて一割いけなかった」という）。次に馬や羊の医者であるリンプー先生には馬と鞍を離してもらふ。最後に草や木の医者であるリンボー先生には顔中に生えたものをとってもらつてつるつるになり、「三十年ぶりでにっこり」笑った。その後、將軍は「大将たちの大将」にしようという王の言葉があつたにもかかわらず、辞退して代わりにリン兄弟を国の医者にしてほしいと頼む。そして自らは故郷に帰り、やがて何も食わず、飲まなくなり姿を消してしまう。村人は仙人になったのだと考えてお堂を建てて祭った。以上のような話である。それにしてもこんな話を作つた賢治は、空想力豊

かな、ホラ吹きのユーモアのある人間だったと思わずにはいられない。

作品の発表された昭和六年の九月には満州事変が勃発し、軍部の力がますます強くなり、暗いファシズムの時代が始まろうという時である。童話とはいえ、この作品の中の將軍はから威張りの無力で滑稽な、あわれな存在である。子供のように自由で無邪気な精神の持ち主であった賢治にとって、軍人的なもの——特にその硬直した權威主義や形式主義は笑いの対象であったと思われるが、その笑いは諷刺というより、温かいユーモアに包まれている。国を守るのは軍人だと教えられた時代（それが侵略の美名であったことは、今となれば明らかであるが）にあって、軍人よりも医者が偉い、軍人の病いを直すのは医者だ、そんなことを正面きって言っているわけではないが、その笑いの根底に無意識にせよ、このような觀念が潜んでいるように思われる。

また興味深いのは、人の医者、動物の医者、植物の医者を同次元で並べていることである。賢治にいわせるなら、癒しとは単に人間のレベルの問題ではなく、動物、植物のレベルまで含めた癒しではなかったろうか。將軍の病気は、人間の、動物のそして植物のレベルでみてもらう必要があった。

私達が病気になれば誰でも人間を見る病院に行くわけで、家畜病院に行ったり、植物医に見てもらうなどといったら笑い話である。しかし、人間の病気は、時に動物や植物の病気の問題であり、植物や動物の病気が人間の病気につながることも多い。放射線によって汚染された植物を食べて病むのは動物、人間であるし、水俣病をはじめ魚介類や猫の病気であった。人間も地上の生物として、この環境の中に、生命の連鎖の中に置かれている。そのことを明らかにしているのは健康な人ではなく、むしろ病気の人であり、病気なのだとも言えよう。学問の細分化が進み、タコ壺的な専門分野に閉じ込めるほど業績をあげ評価されがちな現代にあって、人間—動物—植物の生命連鎖について考え、独自の進化論を内包した賢治の宇宙観、生命観が予言的な意味をもつものとして注目されている

ゆえんである。

II

ところで「北守將軍と三人兄弟の医者」で將軍は白馬に乗って、大きな剣を空にあげ、声高々と凱旋の歌を歌って城門から入ろうとする。その歌詞の中に「とても帰れまいとおもっていたが／ありがたや 敵が残らず脚気で死んだ／今年の夏はへんに湿気が多かったでな／それに脚気の原因が／あんまりこっちを追いかけて砂を走ったためなんだ／そうしてみればどうだやっぱり凱旋だろう」という言葉がある。敵の軍隊を攻撃して倒しての凱旋ではなく、幸いにも敵が脚気で一人残らず死んだための勝利なのだから、あまり威張れたものではないが、その原因が湿気のため、また將軍達を追いかけて砂を走ったためだという。これは文学的な愉快な脚色ではあるが病気の真の原因がわからないうちは馬鹿馬鹿しいようなことでもまじめに考えられたりする。湿気の多いことが脚気の原因だという見方もかつてはあったようである。それに、病因というのもつきつめてみれば科学で解決できない人間的な(?)面を持っている。エイズはウイルスのせいだと科学者はいうが、貧困や性道德の乱れもその背景にあるわけで、そう考えれば、病気の問題は広く人文諸科学の問題でもあろう。

この物語は幼稚・単純な空想の物語のようにも見えるが、軍隊が脚気で苦しんだこと、これは歴史的な事実であったから当時の人々にとって軍隊と脚気は自然に結びつくいわば「軍隊病」でもあった。

脚気は「江戸煩」とも言われ元禄や享保のころにも、江戸や大阪、京都など大都市に流行した病気である。白米のうまさに憧れた都会人の食生活がその原因であったが、当時の人はその原因を知るよしもなく、明治になると「文明病」「開化病」などともいわれた。コレラやペスト、結核などという開化に伴って新しい病気が登場するが、脚気もその一つではないかと考えられたのである。細菌学の発展のめざましい時代で「脚気菌」が発見されるだろう

と思われていた。脚氣になると膝がぐくぐくして、つま先も思うようにあがらず、手もぶらぶら、運動神経が麻痺し、足をつねると指の跡が凹み、体はだるくて疲れやすく、動悸や息切れがし、血圧は低下、心臓障害や呼吸促進を起こし苦悶して死に至る。現在なくなってしまったこの病氣は、明治の中ごろには年間三十万人もの患者があり、死亡者六千人を越え、その専門病院さえ出来（明治十一年）、政府から八千円もの補助金が出たという（当時は米一俵二円）。

海軍軍医総監であつた高木兼寛^{かねひろ}はイギリス海軍の艦船にほとんど脚氣がないのに日本の艦船になぜ脚氣が多いのか——脚氣は青年に多い病氣ではあつたが陸軍や民間の同じ年齢層に比べて海軍に一段と高く、軍艦〔龍驤^{りゅうじょう}〕は乗組員三七一人のうち一六九人が脚氣になり、二五人もの死者を出した——その原因は食糧にあるのではないかと考えた。そこで「お国のためだパンと肉だけでがまんしてくれ」と学問的根拠もないまま半ば実験的にこれを命令した。明治十七年軍艦「筑波」は三十一人を乗せ、二八〇日の航海で「龍驤」と同じコースを辿った。その結果、脚氣患者一五人、死亡者ゼロという驚くべき成果を収めた。高木はその理由を「白米を多食するとタンパク質の割合が減るからではないか」と推測した。もちろん、これは誤りでビタミンB₁の不足によるものであるが、これほど完全に病氣の予防に成功した例は世界の医学史からみて稀であり、この話は世界中で知られることとなった。

ところがこれほど画期的な成功を収めたにもかかわらず、その知恵は陸軍に生かされなかった。ベルリンで最新のカロリー学説を学んできた陸軍軍医の森林太郎（鷗外）はコメのカロリーがムギより高いことを主張して「非日本食ハ将^{まさ}ニ其ノ根拠ヲ失ハントス」という講演を衛生学会で行い、コメの優越を説いた。イギリス流の経験を重視する考えに対し、ドイツ流の原因や観念を重視し、原因の究明が先だという考えが陸軍に支配的であつたこと、あるいはまた、海軍のまねなどしたくないという面子もその背景にあつたといわれる。ともあれ海軍の知恵は陸軍で

何ら生かされず、日露戦争における脚気患者は戦病者総数二十二万人のうち約半数に達した。陸軍の主食がムギ三対コメ七の割合になったのは明治三十八年三月十日の奉天会戦の日からである。

III

脚気の原因が科学的に明らかにされ、単に予防のみならず、実際に脚気になった時の治療法まで明らかにされたのは鈴木梅太郎の力によるものである。

梅太郎は明治七年（一八七四年）四月七日、静岡県御前崎灯台に近い榛原郡地頭方村（はいばら じとうかた）に農家の次男として生まれた。負けず嫌いの餓鬼大将で勉強でも体操でも人に負けると顔をまっかにしてくやしがつたという。小学校の時の校長、松尾利七の「百姓の子供でも勉強すれば偉くなれる」「汽車もガス灯も電信機も紡績機械もみな西洋から入ったものだ、これからは英語を勉強しなくてはダメだ」という言葉に影響を受け、川崎町の東遠塾に入り、そこで慶応義塾を出た戸塚国次郎から英語を学んだ。戸塚は「科学は国の独立自尊を守り社会の進歩に役立つと共に、人間の命を守り生活を豊かにする」と自然科学を重視する福沢諭吉の教えを説き、これが梅太郎の自然科学を選んだ一因とも言われる。また戸塚の教えで鍬と鋤、下肥に頼る従来の農業から土と植物について科学的に研究することによって、農家の人々を助けたいと考えた。明治二十二年、十六才で駒場農学校予科を受けて難関を突破し、その後、明治二十九年、二十三才で同校を卒業後、大学院に進みOskar Loew教授のもとで植物生理学を専攻、明治三十四年には「桑樹萎縮病病原論」によって農学博士の学位を受けた。同年文部省留学生として渡欧、チューリヒのSchulze, Bamberger両教授のもとで有機化学を学んだ後、ベルリン大学のFischer教授（一九〇二年、糖類およびプリン族化合物の研究でノーベル化学賞を受けている）のもとでタンパク化学を研究した。明治三十九年九月二日、三十二才で帰国するや五月三日の発令で盛岡高等農林学校教授となって赴任した。

同校は、明治三十六年に開校した我国最初の農業専門学校で、農学科・林学科・獣医学科を擁していた。梅太郎はここで「有機化学」や「植物栄養論」を講じた。同年九月二十五日には高等農林教授のまま東京帝国大学助教教授兼務となり、本拠を駒場に移し盛岡では講義だけ担当した。明治四十年九月には東京帝国大学農学部教授となり生化学を担当（これが我国で生化学講座が設けられた最初のものである）、東京本務、盛岡兼務の形で明治四十一年九月まで集中講義を続けた。研究論文としては盛岡農芸会報第一号（明治四十一年二月一日）に「柞蚕及栗綿の科学的組成について」（吉村清尚と）、同第二号（明治四十二年四月二十二日発行）に「米の蛋白質の成分」（吉村清尚、富士省三と）、盛岡高等農林学校校友会報第十号（明治四十三年十一月二十五日発行）に「鰹の塩辛中の窒素化合物について」（米山兆二、大嶽了と）が発表されており、同校における梅太郎の研究の一端が伺われる。梅太郎は、明治四十三年（一九一〇年）十二月、東京化学会で「白米の食品価値並びに、動物の脚気様疾病について」と題する研究発表を行い、コメ糠からアルコール抽出とリンウォルフラム酸沈澱の手法で部分精製したものが脚気を治療し、これが今まで知られていない新しい栄養素であることを示した。翌年一月、日本語の論文を発表する中で、その物質を「アベリ酸」と命名した。さらに翌四十五年（一九一二年）七月に独文で「米ヌカ成分オリザニンとその生理学的意義について」をドイツの生化学雑誌 *Biochem. Z.* に発表、アベリ酸に混入していたニコチン酸を除き、残りの有効成分をオリザニンと再命名、それを結晶化した。ビタミン発見の先駆的業績として世界に誇るべきものである。

梅太郎は留学中の体験から西洋人の体格・体力が日本人よりすぐれているのはなぜか、単に人種が違うからというのではなく、食物の違いのためではないかと考えて、日本に帰ったらコメのタンパク質を調べて日本人の体位を向上させる方法を探ろうと決意した。そのため高等農林でコメの研究に着手、肉のタンパク質から得られるアミノ酸

と比較した。しかし、アミノ酸を分離して確認するための設備も不十分で悩んでいたところに動物実験を偶然思いついたのである。高等農林には獣医学科もあってウマやウシを飼育していたし、イヌやウサギも飼っていた。イヌ・ウサギの飼育箱が廊下に並ぶ前を梅太郎は農芸化学教室に通っていた。それを見てある時はっと思ひ当たって、それまでの化学実験一本槍の方法を動物実験を主とすることに方針を切り換えた。最初イヌとネコを使ったが、次にハトとネズミを使うようになった。ハトによる実験で玄米と水を与えたハトは元気であるのに白米と水だけのハトは死ぬことが確かめられた。このことからコメ糠を研究することになり、これがオリザニンの発見につながったのである。

梅太郎はその後、サリチル酸、乳酸、サルバルサンなどの工業的な製造を完成し、小児栄養保全のため母乳代用品（調整粉乳）、強化パンなどを考案し、さらには米不足解消のため合成清酒を完成したりした。このような業績が評価され、昭和十八年文化勲章を受け、この年九月二十日六十九才で逝去した。その一生は科学と厚生を結びつけ、国民の健康のために科学を役立てようという使命感と情熱に貫かれていた。梅太郎は「産業の発達は科学の進歩により達成される」と常々力説していたが、自ら発明、発見をもつて産業の発達に貢献したのである。

高等農林での梅太郎の生活は短いものではあったが、帰国後最初に取り組んだテーマが数年後にオリザニンの発見につながるものであったし、動物実験を思いついたのも高等農林という環境によるものであることを思えば、その意義は少なくない。また、高等農林の助手であった大嶽了が後、東京大学に転じて、塩酸と結合した純粋なオリザニンを分離し、オリザニンの組成を決定したことなど考えてみると、この地においてすぐれた研究者を育てるにあたって大きな役割を果たしたと言えよう。教え子であった雲野潔の思い出によれば、色の黒い角ばった顔、ツンと威張ったような態度で全く理解できない難しい講義であったというが、親切に就職の世話までしてくれる人情

味のある先生であつたらしい。家族と共に盛岡で暮らしたのは五ヶ月に足りないが（大沢川原にその借家があつた）、当時五才になる長女久仁子の手を引き、妻須磨子がバスケットを下げて不來方城をしばしば散策するなど、みちのくの小京都といわれる盛岡での生活を楽しんだようである。

IV

宮澤賢治が盛岡高等農林学校に首席で入学したのは大正四年（一九一五年）であるから、梅太郎が去つて約十年ほど経っている。しかし、大正七年の賢治の卒業論文「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」は梅太郎が高等農林で講じた「植物栄養論」に直結するテーマである。また、賢治のついた教授、関豊太郎は梅太郎の高等農林における同僚でもある。梅太郎の名を聞き、その業績を知る機会も多かったであろう。賢治の同級だった出村要三郎によれば、賢治は梅太郎の講演を感動をもって聞いたとの証言もある。

「北守將軍と三人兄弟の医者」のもとになった原稿をみると植物医のところには「葉が黄色にちぢれておまけにちぢまった桑」もやってくるが、これは桑の萎縮病の症状に一致する。賢治は梅太郎が「桑の萎縮病」を研究し、その脅威から農家を救つたことを知っていたであろう。また、梅太郎がオリザニンの発見者であることももちろん知らなかったはずはない。

「グスコブドリの伝記」に次のような一節がある。

「ブドリは十になりネリは七つになりました。ところがどういふわけですか、その年は、お日さまが春から変に白くて、いつもなら雪がとけると間もなく、まっしろな花をつけるこぶしの樹もまるで咲かず、五月になつてもたびみづかに曇くもがぐしゃぐしゃ降り、七月の末になつても一向に暑さが来ないために去年播まいた麦も粒の入らない白い穂しかできず、大抵の果物も花が咲いただけで落ちてしまったのでした。そしてとうとう秋になりましたが、やっぱり

栗の木は青いからのいがばかりでしたし、みんなでふだん食べるいちばん大切なオリザという穀物も、一つぶもできませんでした。野原ではもうひどいさわぎになってしまいました。」

オリザとはコメの学名オリザサティバ (*Oryza sativa*) にちなんでつけられたことは明らかである。火山局の技師であるブドリは自らを犠牲にすることによって(火山を爆発させて気温を上昇させる、それによって冷害を防ぐというやり方で、現代の地球の温暖化の問題についても考えさせられる話である)イーハトヴをオリザの病氣——即ち飢饉による人の死から救った。それは自らの命を人々のために捧げようという賢治の理想を示す物語であるが、同時に科学の力による農民の救済とも言える。賢治は「宗教は疲れて近代科学に置換され然も科学は冷たく暗い」「農民芸術概論綱要」と宗教や科学を批判したが、その宗教や科学の力によって人々の苦しみを救えると信じていた。そして科学の果たす役割に期待もしていた。だが同時に科学の世界観は「冷たく暗い」非情な因果律であって、倫理とか理想——賢治の言葉で言えば「世界に対する大なる希願」こそ根本になくはならないものだと考えた。

グスコーブドリの暮らしの舞台であるイーハトヴとは岩手県をエスペラント風に呼んだ名前である。「注文の多い料理店」の広告文をみるとイーハトヴは「著者の心象の中に、このような状景をもつて実在したドリームランドとしての日本岩手県である」と記されている。賢治の生きた明治から昭和初期にかけて、現実の岩手県は凶作が相次ぎ、農民は食うや食わずの悲惨な生活をしていた。そのように苦しむ人々を救いたいというのが賢治の「ドリーム」であった。それは自分勝手な甘い夢ではなく、悲願ともいうべきものであった。

賢治は自然科学を学び、当時として最も進んだ深い豊かな科学的知識・教養を身につけた農業技師であり、農業技師として自分のもっている力を農民のために役立てたいと考えた。その根本には仏教徒としての信念がある。自ら病床にありながら「全テヲ救フ大医王(＝釈迦の異名)タレ」と「雨ニモ負ケズ」手帳に記しているが、そこに

は病氣と限らず、人生のあらゆる苦しみから人々を開放したいという強い使命感を伺うこともできる。賢治は個人主義——というより、利己主義といった方がよいだろうが——的な、金銭欲、名声欲を越えた「宇宙意識」「銀河意識」に生きようとしたが、これらの言葉に科学と宗教を統合しようとする観念をみることもできる。

自然科学は現在「諸刃の剣」として、私達の生活を快適にも便利にもしている反面、原水爆や環境破壊に象徴されるような危機、不安をもたらしている。このような時代にあつて賢治のスケールの大きな思想は、あらたな輝きを増していると言えよう。

(注) 本稿をなすにあたって、岩手医科大学教養部中舘興一教授(化学) 力丸光雄教授(同) からいろいろと御教示賜りました。ここに記して感謝申し上げます。また、参考文献として「オリザニンの発見——鈴木梅太郎伝」(斎藤實正著 共立出版)「鈴木梅太郎先生伝」(朝倉書店)「農芸化学科の歩み」(岩手大学農学部農芸化学科大矢教授退官記念事業会)などを活用させて頂きました。(本稿は平成七年盛岡市で行われた日本ビタミン学会第四十七回大会のパンフレットに寄せた文章である)

三、宮澤賢治と小岩井農場

I

宮澤賢治生誕百年ということで、ここ岩手は空前の賢治ブームです。いや、これは岩手に限ったことでなく、日本全国の現象のようにも思われますが、皆様の地方ではいかがでしょうか。

私は一年生の「文学」の授業で、この賢治と正岡子規の二人を中心にとりあげています。賢治を選んだ理由は、もちろん私自身、賢治の生き方や思想、その作品に深い魅力（あるいは謎）を感じているということもありますが、それ以上に、青春をこの岩手で過ごす学生達が、岩手の生んだ、この世界的（決して誇張ではありません）文学者（賢治がこの言葉を聞いたら「ああくすぐつたい」と照れて逃げ出すに違いないでしょうが）に触れて自らの心を豊かにしてほしいからです。校歌にも「心をみがき技を練り、知の一切を料として」と歌っているように、「心をみがく」ことも「誠の人間」を目指すために欠くことのできないものであり、賢治の文学も又、この「心」を大切にしようとする精神に貫かれています。そして賢治自身があふれる「心」の人でした。賢治の書いたものは、その深い悩み、悲しみ、憤り、笑い、愛が思わず言葉になってしまったような趣があります。

又、賢治の文学は、この岩手の自然、大地と深く結びついています。近代の文学者で、これ程豊かな大地性（そして宇宙性）を感じさせる人はいないと思います。賢治の詩や童話は、学生にとって第二の故郷となるこの岩手の風土、自然への最良のガイドブックとも言えます。賢治を通してイーハトーヴォ（心象の中に存在するドリームランドとしての岩手）の息吹に触れ、明日への力としてほしい、というのが、賢治を取り上げている理由の第二です。

今回は、その中から賢治と小岩井農場とのかかわり、というより、賢治の心象の小岩井農場について考えてみましょう。

II

盛岡市の北西に南部富士の異称をもつ岩手山がそびえています。小岩井農場はその南麓に広がる牧場です。面積は二千六百ヘクタールで、民間牧場としては最大のものだといいます。その牧場の中を通る道は国民休暇村網張温泉に通じており、車窓からは牧草地に牛や羊の群れが見え、サクラやマツ、カラマツ、ポプラ並木が連なり、牛舎やサイロも見えます。小岩井農場は、もともと荒れ果てた原野でしたが、井上勝、岩崎弥之助、小野義真の三人の力によって、明治二十四（一八九一）年に牧畜と植林を中心に、輸入された種畜や農具を用いて牧場経営が始められました。小岩井農場の名称の由来もその三人の名字のかしらをとり、小岩井農場と名づけられました。現在、種牛、肉牛、種鶏、羊を飼育する他、乳製品や肉製品を生産し、その中には「牧場の天文館」、「牧場の銀河鉄道」などがあり、冬は「岩手雪まつり」が催されます。（観光部のコマースィヤルになってしまいました）今や賢治も小岩井の観光事業に一役買っているわけですが、賢治の生きていたころ、ここは西洋風の農場、牧場そのものであり、観光地のイメージとはほど遠いものでした。賢治が小岩井農場を初めて訪れたのは、盛岡中学時代、明治四十三年（十四才）九月の岩手山登山の時だと思えます。山頂から網張口へと下山すれば、必ずこの小岩井を通る事になります。現在は快適なドライブコースになっている網張と小岩井農場を結ぶコースですが、当時はバスも通っていませんから、すべて歩きです。賢治は運動神経は鈍かったのですが、きわめて健脚で、登山の時などさっそうとして登ったといえます。岩手山登山の時だけでなく、小岩井農場を目的として遠足することもよくあり、大正十一年五月七日には、稗貫農学校の生徒を引率して、四日後の五月十一日には盛岡中学校の後輩、森佐一と共に訪れてい

ます。「小岩井農場」という詩は、これらの体験をもとにしたものだと思われます。

III

大正十三年四月、賢治は「春と修羅」という詩集（自らは「心象スケッチ」と呼んでいます）を自費出版しました。時に二十八才、稗貫農学校の教師となって三年目のことでした。明治以後の詩集の中で五冊を選ぶとすれば、間違いなく、そのうちの一冊に入るだろうといわれるこの詩集は、出版当時、ほとんど注目されることがありませんでした。当時の文学的な常識からあまりに離れたその破天荒な発想、詩情、語彙からしてそれは当然のことだったでしょう。いや、無数の研究者、賢治ファンがいる現在でもなお、この詩集は深い謎に包まれ人々の理解を拒んでいるように思われます。かくいう私も、この詩集に大いに悩まされながら、いかにもわかった風を装って（？）授業を進めているというわけなのです。おそらく、この詩集には賢治の青春の情念と思索が、謎めいた玉手箱のように詰め込まれています。

「春と修羅」には「小岩井農場」の総タイトルのもとに「パート一」から「パート九」までの詩が収められ（ただし欠落しているパートもあります）全部合わせると九百行を越えるという長編詩です。

そもそもパート一、パート二…などというのが憎い。今や、ありふれたこんな言い方ですが、当時こんな言葉をごく自然に使うという人はいなかったと思います。この熱烈な仏教徒は、ずいぶんハイカラな言語感覚の持ち主で、イーハトーヴォ、モリーオ、セnderド、ジョバンニ、グスコブドリ、オッペルなど無数のバタ臭い現代風の造語を生み出していますが、パート一…などというのも、そのささやかな一例にすぎません。

賢治は鉛筆つきの手帖を首にぶら下げて歩きながら詩を作ったといわれています。この詩を読み、そして実際に賢治の歩いたコースを辿ってみれば、そのことが実感できます。賢治生誕百年を記念して小岩井農場の観光部で企

画した文学散歩に、学生と一緒に参加し、小岩井駅から旧網張街道を三時間あまり歩いて、私もよくそのことがわかりました。

「小岩井農場」という詩の末尾には（一九二二、五、二二）とあって、賢治がこの詩を作ったのは、大正十一年（二十六才）の五月二十一日であることがわかります。盛岡から田沢湖線の汽車に乗った賢治は、小岩井駅で下車して小岩井農場を訪れました。現在、旧網張街道と呼ばれるそのコースは、道幅二メートル程の、舗装もされていない田舎道で、藪や林となって途中で途切れていますが、当時は網張温泉まで続いています。

IV

「こんなせはしい心象の明滅をつらね／すみやかなすみやかな万法流転のなかに／小岩井のきれいな野はらや牧場の標本が／いかにも確かに継起するということが／どんなに新鮮な奇跡だろう」（パート一）——これは小岩井の自然、風物によせたいかにも賢治流の愛着と感動の表現です。

あらゆる物事が無常であり、常に変化してやまない流転の中にある。その中にある自分も、もちろん無常なものとして、しかも心もち「仮定された有機交流電燈の一つの青い照明」（序）つまりは肉体ばかりでなく、心象世界を内に抱きながら生きている。その見るもの、聴くものは単に五感の感覚としてではなく、心象の風景として存在している。その心象の風景はめまぐるしく変化し、一瞬一瞬消え去るはかないものである。しかし、そのように消え去ってしまうはかないものにしろ、この小岩井の美しい風物に触発されて次々にくり広げられる心の風景であり、それは奇跡にも近い新鮮な美しさだというのでしよう。賢治にとって小岩井はいかにもみずみずしい、新鮮な天然の美の宝庫でした。

賢治はくらかけ山（小岩井農場の北にある小さな山）の下あたりの、明瞭な空気の中で咲くおきな草を思い描

き、「野はらは黒ぶたふ酒のコップをならべてわたしを款待するだらう」と行先のことを楽しく空想し（パート二）、空の光を呑みこみ、光波のために溺れているとも見えるひばりの姿を見、その鳴き声を耳にし（パート二）、ひばりどころか、鳥の小学校に來たと思われるほどにぎやかに鳴いている無数の鳥を目にします（パート三）。農場の本部のあたりでは掘り起こされた畑、耕地を目にし、四十五本の桜を見ながら（パート四）進んでゆきます。

しかし、太陽を横切る黒雲が現れると、我知らずとんでもない幻想が浮かんできます。「侏羅^{じゅうら}や白堊のまっくらな森林のなか／爬虫がけはしく齒を鳴らして飛ぶ」（パート四）——そうです、恐竜や爬虫類の跋扈するジュラ紀、白堊紀の光景がまざまざと浮かんできます。その気味悪い幻想を打ち消そうと力いっぱい元氣を出して口笛を吹くと今度は「陽の錯綜の中に透き通った／ほのぼのと輝いて笑う／すあしの子供達」（パート四）——つまり、ユリア（ジュラ紀はユラ紀とも呼ばれましたが、そのもじりでしょう）やペムペル（ペルム紀のもじりで、北上山地はペルム紀の地層が多く見られるといえます）と呼ばれる「天の童子」の幻想が浮かんできます。地獄的、あるいは極樂的な世界を好んで描いた賢治ですが、それは文学的な脚色というよりおのづと沸きあがった幻想を素材にしたものだったようです。一方で弱肉強食の世界を象徴するような恐竜や爬虫類、他方で天上界の人々、それは賢治自身の中にある修羅性と仏性の二面に対応するもののようです。恐竜時代の幻想というのは、おそらく脅迫神経症的な脅えから発せられるものであり、それを乗り越えて生きる道を示しているのが賢治にとっての宗教の役割であつたかもしれません。

「五月のきんいろの外光のなかで／口笛をふき歩調をふんでわるいだろうか／たのしい太陽系の春だ／みんなはしつたりうたつたり／はねあがったりするがいい」（パート四）と賢治は言います。黒い雲におおわれた太陽ではなく、小岩井の春、五月の明るい光の中を幻想を断ち切つて、寂しさや悲しみ、憤りを払いのけて、口笛を吹いて

さつそうと歩く。そして自ら「光炎菩薩」と親しみをこめて表現する恵みの太陽のもと、自分一人楽しむだけではもの足らず、つい他の人にも、一緒になって走ったり、歌ったりして、この気圏の春を楽しもう、と呼びかけてしまいます。これはまさにやむにやまれぬ、喜ばしいイーハトーヴォへの招待です。

賢治のイーハトーヴォの大地に寄せる自然感情は宗教感情に近いものがあります。イーハトーヴォの「大空」——「いろいろな天の海には／聖玻璃の風が行き交」（「春と修羅」）ついています。賢治は岩手の澄んだ風に吹かれた時、それを身も心も清める——聖める聖なる風として受け止め、心を浄化したのでした。又、「ウーイ／神はほめたられよ／みちからのたたふべきかな／ウーイ／いい天気だ」（「真空溶媒」）などと書いているのを見ると、聖なる空気に酔っぱらって神を賛美することもあったようです。又「鉛筆のさやは光り／速やかに指の黒い影はうごき／唇を円くして立つてゐる私は／たしかに気圏オペラの役者です」（「東岩手山」）とあるのを見ると、イーハトーヴォの宇宙的風光の中で、それを賛美するあまり、歌い踊り出したこともありそうです。さらに又、「截られた根から青じろい樹液がにじみ／あたらしい腐植のほひを嗅ぎながら／きらびやかな雨あがりの中にはたらけば／私は移住の清教徒です」（「過去情炎」）などというフレーズには禁欲的な清らかな生活を志向する賢治の心も見えます。賢治にとって宗教は、経典やそれを生きる人格への畏敬、崇拜であつたばかりでなく、まず岩手の自然、その聖なる風、聖なる太陽、聖なる山々……を全身、全霊で受けとめて生きることであつたようです。私のような凡人には、とうてい賢治のこの、自然に寄せるあまりにも強烈な感情は理解できません。とは言つても、小岩井の風光の中に一人立つ時、かすかながら世の中のことを忘れて心の浄化されるような思いを味わうことがあります。その時、私も賢治に同感して「聖玻璃の風」——聖らかな透明なガラスのような風が、このイーハトーヴォに吹いていることを実感するのです。

「野原のほかでは私はいつでもはばけてゐる／やっぱり柳澤へ出よう／こんな野原の陰惨な森の中を／ガツシリ黒い肩をしたベートーフェンが／深く深くうなだれ／又ときどきひとり吼えながら／どこまでもどこまでも歩いてゐる（パート五）。パート五とパート六は「春と修羅」には載っていませんが、原稿は残っています。おそらく農学校の同僚のことがいろいろ書かれているため、プライバシーを考えて詩集に収めなかったのでしょうか」

「はばけている」というのは方言で「気がふさいでいる」という意味です。確かに家の中——豊かな商家である、質屋の店先にいた賢治は病的なまでに、鬱的なこともありました。野外の解放感はその反動からくる喜びでもあったのでしょう。それにしても、小岩井農場でベートーフェン（私も賢治にならってこう書きますが、もちろんベートーヴェンのことで、ドイツ語のリヒター先生によれば、早く発音すればベートーフェンの方が原音に近いのとです）に会った人など誰もいないでしょう。しかし、こちらの方は、爬虫類や恐竜やユリア・ペンペルというけたはずれの幻想と違って、生きた人ですからわからないわけではありません。私達も小岩井に行った時、誰彼のことを思い浮かべるといふことはあります。

実は「小岩井農場」という詩には、ベートーフェンの「田園」の影響があるといわれています。たとえば「さうです農場のこのへんは／まったく不思議におもはれます／どうしてかわたくしはこちらを／der heilige Punktと呼びたいやうな気がします」（「パート九」という一節の der heilige Punkt ダーハイリゲプンクト英語で言えば The holy point 即ち「聖なる地点」という言葉はベートーフェンが愛してやまなかつた Heiligenstadt ハイリゲンシュタット（訳せば「聖人の町」）のもじりから来ていることは間違いないと思われまふ。

ベートーフェンは一七九八年、二十八才のころから難聴に悩み始め、三十才のころにはほとんど聞こえなくなつ

ていました。そればかりでなく四六時中耐えがたい耳鳴りに襲われてもいました。そこで一八〇二年、その療養のため、ボンからハイリゲンシュタットに転居しました。ハイリゲンシュタットは、ウィーン市内から馬車で小一時間くらいの、のどかな景色のよい田舎だといえます。（してみるとウィーンは盛岡、ハイリゲンシュタットは小岩井ということになります）ベートーフェンは、自然を愛し、森や野原をさまよい、神と語りました。音楽家として致命的とも思われる耳の病いに、絶望のあまり死を思い、遺書（「ハイリゲンシュタットの遺書」の名で知られています）を書いたベートーフェンは、やがてその苦悩を乗り越えて生きる道を見出します。そして、それ以後、最も円熟した、又最も深刻な、悲壮な、熱情的な、瞑想的な多くの名作を生み出したといわれています。苦悩を乗り越えて大いなる理想に生きる——賢治はベートーフェンに自分の生きる道を暗示されたのだと思います。

第六シンフォニー「田園」は、ハイリゲンシュタットで完成されたもので、田園生活の愉快的気分や、楽しい経験を浮き彫りにしているといわれています。賢治の「小岩井農場」にもそんな気分が漂っています。「注文の多い料理店」の広告ちらしの中で「これは田園の新鮮な産物である。われらは田園の風と光の中からつややかな果物や、青い蔬菜を（と）一緒にこれらの心象スケッチを世間に提供するものである」と書いたのは「田園」を意識しているのかもしれませんが。詩「小岩井農場」で注目されるのは、雲雀や鶯（パート一）ロンドカプリース（輪舞曲）を歌うたくさんの小鳥（パート三）雉子（パート四）など、特にその前半部に様々な鳥の鳴き声が入っていること。「田園」にもナイチンゲール（夜、啼く鶯）やうずら、かつこうなど様々な鳥の鳴き声が登場しているといわれます。

ベートーフェンがハイリゲンシュタットの田園を歩きながら、自らの苦悩をいやし、田園の詩情に深い歓喜と慰めを得たごとく、わが賢治も小岩井農場で苦悩をいやし、歓喜を味わい、明日に向かって生きる決意を固めたので

した。思えば賢治も、今、稗貫農学校の教師とは言え、教師としての生活を望んだわけではなく、実のところ、生涯独身を貫き、宗教に生きる決意を固めていました。それは、父との対立ともなり、自らを生かすべき道をつかめないまま、深い自己嫌悪と、自虐的なまでの暗い心境から、ついに出郷し東京で暮らしていたのは、この詩の書かれるわずか数ヵ月前の出来事であったのです。妹トシの病気の知らせに帰郷した賢治は、たまたま稗貫農学校の教師として勤め、その生涯で最も明るい四年間を過ごしました。詩「小岩井農場」にも、自然の風光に歓喜する心がベートーフェンのイメージと重なって写し出されているのだと思われます。

（本稿は岩手医科大学父兄会報「啐啄」の第二十九号、平成八年に寄せたものである）

四、宮澤賢治入門——宗教と性

平成九年度の公開講座は宮澤賢治入門というテーマで次のような項目に従って行われました。

第一回	九月五日	自我の目覚め	第二回	九月十二日	進路の悩み
第三回	九月十二日	友情	第四回	九月二十六日	苦悩と信仰
第五回	十月三日	春と修羅	第六回	十月十七日	小岩井農場
第七回	十月二十四日	原体剣舞連	第八回	十月三十一日	永訣の朝
第九回	十一月七日	あすこの田はねえ	第十回	十一月十四日	雨ニモ負ケズ

講義内容の全てを紹介することはできませんので、ここでは第六回の内容に即して、宗教と性というテーマで内容紹介とさせていただきます。宮澤賢治は私たちに宗教とは何か、宗教的な心とは何かをその作品と生涯の両面において示している希有な存在です。賢治は勿論職業としての宗教家ではありませんでしたが近代の文学において賢治ほど宗教を考え、宗教に生きた文学者はいませんでした。

賢治にとって宗教は心の問題であり、「心を修める」ことによって顕微鏡で見えないものまで明らかに見る仏の知恵に近づく事でした。賢治は自然科学を学び、顕微鏡を通して、馬鈴薯の澱粉とか岩石を見た人でした。と同時に肉眼では見えない物、法則を極めて強く意識した人でした。物質世界を越えた奥にある原理——賢治はそれを「宇宙意志」とか「法華経」とか「エレキ」などと様々に名付けていますが、これは自分の感じている宇宙に満ちる力をなんと表現したらよいのか、苦心したからなのだと思います。既成の言葉で説明しがたい名付けがたい力——そ

れは賢治にとって自然科学的な冷たい法則ではなく温かな、善なる、感謝すべき宇宙の根源的な力でしたが、それを直観し、信じ、これと一体になろうと努めました。それは当然のことながら実行の問題にも直結するものでした。経済的、そして文化的にも大変な貧しさを担って生きる農民たちを救済しようとしたのも、その宗教的信念から生まれた実践活動でしたが、ここではそのような社会的な実践ではなく、個人的宗教的实践としてなされた宗教的な行為を考えてみます。教典を読む、読経する、祈る、座禅をする、瞑想するなど仏教には様々な宗教的な「行」がありますが、ここでは問題を絞って、禁欲——性に対する禁欲について考えてみます。賢治は日本においてきわめて珍しい宗教的禁欲主義者でした。賢治が若いころから、生涯独身を貫こうとしたことは明らかです。例えば十二歳の時に書かれた次の手紙をご覧下さい。

「私の信ずる所正しきか否や皆皆様にてご判断下され得る様致したく先ずは自ら勉強して法華経の心をも悟り奉り働きて自らの衣食をもつぐのはしめ進みては人々にも教え又給し若し財を得て支那、印度にもこの教を広め奉るならば誠に父上、母上を初め天子様、皆皆様の御恩をも報じ折角迷惑をかけたる幾分の償をも致すことと存じ候。(略) 先ず暫く山中にても海辺にても乃至は市中にても小なる工場にても作り只専らに働きたく又勉強致したくと存じ候。いずれにせよ結局財を持つてするにせよ身を持つてするにせよ、役にたちて幾分の御恩を報じ候はば沢山に御座候。何卒人並外れながら只今より独身にて勉強し得る様また働き得る様御許し下され度く本日もまた極めて不整頓ながら色々とお願ひ申しあげ候。」

この頃に書かれた他の手紙も参考にして考えますと次のようなことが分かります。

- ①賢治は自分の人生の目標を法華経の心を悟り、それを人々に伝える事にあると考えていた。
- ②何の仕事に携わるかはあまり重要でなく「勉強」(賢治はこれをおそらく経典を読み心を修めるという意味で使

っています）が一番大切だと考えていた。

③両親から人並み以上に愛情を受け、恵まれた教育を授けてもらった事を痛切に意識し、両親から受けた恩に報いるためには出家するのが一番でありこれ以外にないと考えていた。

④世間一般から見ればきわめて異例のことではあるが、生涯独身を貫きたいと決心していた。

信仰に生きることは何も独身である必要はなく結婚し家庭をもつても何ら問題はない、というのが一般の考えでしょう。性に対して寛大な現代では賢治のこうした考えはなかなか理解しにくいものがあると思います。なぜ賢治はこのような考えを持つに至ったのでしょうか。賢治における宗教と性の問題はきわめて重要な問題ですが、それを明確に述べているのが「小岩井農場パート九」という詩の後半部分です。

「小さな自分を区切るこのできない この不可思議な心象宇宙のなかで もしも正しい願いに燃えて じぶんとひとと万象といっしょに 至上福祉にいたろうとする それをある宗教情操とするならば そのねがひから砕けまはた疲れ じぶんとそれからもひとつのたましひと完全そして永久にどこまでも一緒に行くとする この変態を恋愛という そしてどこまでもその方向では 決して求めえられないその恋愛の本質的な部分を むりにもごまかし求め得ようとする この傾向を性欲という」

賢治はここで「宗教情操」を定義して、全てのものの「至上福祉」を願うことにあると言っています。確かに仏教の「慈悲」といい、キリスト教の「愛」といい、宗教はいずれも生きとし生ける者に対する慈しみを説いています。単なる利己的な愛を乗り越えて全ての人、生き物を愛するようにと教えています。愛するというのは教義という理屈、理論があつてそうするのではなく、自然に可愛いと思ひ、愛しいと思ひ、かわいそうだと思うことでしょうか。そうした人間の内なる自然な感情——それを賢治は宗教情操といったのでしよう。私はまずこの「情操」

という言い方に注意したいと思います。

大胆に言えばこの「情操」が豊か過ぎたゆえに宗教家にならず、文学者になったのだと思います。宗教家は教義を説きます。直接、ある特定の宗派の教義を説き、道徳的な言葉で人を導こうとします。一時期の賢治自らがそうでした。無二の親友であった保阪嘉内に対する強烈な法華経信仰の、国柱会入会の強要はその一例です。友を同じ信仰に導けずついに絶交に至ったことは賢治の心の傷となっていたのではないかと思います。賢治はこの体験を通して二度と剥き出しで特定の宗教を迫る事をしなくなります。それは理屈や教義でなく情操としての、文学としての宗教感情こそ生きた宗教として人々にも受け入れられるし、そもそも宗教はそのようなものこそ本物だと考えたからではないでしょうか。それは心優しい、内気ではにかみやの賢治にとって誠にふさわしい布教の方法でもありました。街頭説教したり花巻の町をお題目を唱えて歩く賢治の姿はいかに日蓮門下の振る舞いのように見えようとも賢治の性質に合わないものでした。のみならず、特定の宗教へのこだわりは賢治の、偏らない普遍的なものへの志向と一致しないものでした。賢治の心の奥に個々の宗教を越えた普遍的宗教、情操ということばでしか呼べないような、原始的宗教感情があつたとも思われます。賢治が宗教情操という言葉を使い、自分の信ずる日蓮の教えだ、と言わず、仏教の精神だとも言わなかったのは、広く生きとし生けるものを愛する気持ちは特定の教義を越えて多くの人に共通の宗教的な感情だと考えていたからだと思います。人間には特定の宗派以前に宗教的な心情というものがあるのではないのでしょうか。他の人間や生き物を愛することもそうした人間性の自然だといえれば余りに楽天的な見方だと言われるかもしれませんが、人間には利己的な一面と利他的とも言える一面があると思います。なににより賢治自身がそういう人や生き物を愛さずにはいられない人だった。賢治にとって宗教とは確かに法華経の信者であつたにせよ、それ以上に何宗ともいわれない情操として、心の深くに潜んでいたものだと思います。

しかも賢治は「至上福祉」は一人自分の理想とする所ではなく、「ひとと万象」とともに求め続けるものだという壮大な考えをもっていました。この地球をはじめとする宇宙全体がそうした幸福目指しての発展の途上にあると考えていました。これまた賢治の宗教観を考える場合よく引用される言葉に「たとへば宇宙意志というやうなものがあつてあらゆる生物を本当の幸福にもたらしたいと考えているものかそれとも世界が偶然盲目的なものかといふいわゆる信仰と科学とのいづれによって行くべきかという場合私はどうしても前者だということです。すなわち宇宙には実に多くの意識の段階がありその最終のものはあらゆる迷誤をはなれてあらゆる生物を究竟の幸福に至らしめやうとしている」という一節がありますが、この言わば「善なるもの」としての宇宙意志を信じ、それに従つて生きていこうというのが賢治の変わらない信念でした。

この宇宙意志と一致して生きようという決意を胸に秘めている賢治にとって、特定の異性への愛は、たとえそれが自然なものであつても、否定せざるを得ないものでした。「私は一人一人について特別な愛というものは持ちませんし持ちたくもありません。さういう愛をもつものは結局自分の子どもだけが大切という当たり前のことになりますから」ということばも書簡のなかにみえます。賢治にとって、恋愛とは宇宙意識を持つて生きようという大きな理想を貫くことの困難さゆえにそこから「砕け」「疲れて」求める異性の魂との完全なる融合でした。「変態」という言葉は、単に変化した形というのではなく、転落した歪んだものというマイナスの意味がこめられていると思います。恋愛の定義として「自分と異性の魂が完全に永久に一致することだ」というのも、先程の宗教情操の定義と同じように、きわめて正確な本質を捉えた言葉だと思えます。生涯、独身を貫き、女性を知らなかった賢治はそれにもかかわらず、他の多くの人以上に恋愛や性の心理に精通していました。賢治は利己的、生物学的な欲望に支配される事のない極めて冷静な目で性を見つめていました。

それは宗教と科学による性の客観化だと思います。宗教は自己の欲望から自由になれと教え、科学は性の欲望が動物の種族維持の本能から発せられたものと教えます。前者は倫理的、後者は客観的、科学的な説明ですが、いずれも性という最も主観的、主体的な欲望をそのいわば、抜きがたい輪廻の、宿命の輪から抜け出して見る、という点では共通していると思います。賢治はハバロックエリスの「性学体系」なども原書で読んでいたと言います。

賢治の性について語った言葉はきわめて興味深いものです。たとえば次のような言葉。①「女性の性器は、子どもを温めなければならないので、体の中心にある、お腹の中に入り込んでへこんだ、男性の性器は、精子がひやされないと駄目なので外にぶら下がった。それだけの違いで、本質的には同じものが、別々の形になったんですよ」②「労働と性欲、性欲と思索、思索と労働、こんなように二つずつうまい具合に調和すれば、まあ辛うじて成立しますね。肉体労働と精神労働それに性欲と、この三つを一度に生活の中に成り立たせるということは、まずできません。日本の農民は肉体労働と性欲だけの生活をふるい時代から押しつけられて、精神労働を犠牲にただ二つだけやってきたのですね」③「性欲の乱費は、君、自殺だよ。いいしごとは出来ないよ。瞳だけでいいじゃないか。ふれてみなくたっていいよ」「おれはたまらなくなると野原へ飛び出すよ。雲にだって女性はいるよ」「花は折るものじゃないよ。その物を握らないうちは承知しないようでは、芸術家の部類に入らないよ。君、風だって甘い言葉を囁いてくれるよ。さあ、行こう」

これらの言葉から分かるのは賢治が性の問題についてきわめて多角的に考え、独自の行動様式をもっていたことです。即ち①からわかるのは性についての科学的な、理性的認識です。もちろん、現代でも正しいとされている考えですが、もしかすると賢治は男も女も元々、同じであり、進化の究極に性のない天子のような存在を考えていたのかもしれませんが。②でわかるのは性を社会的、歴史的に見ていたということです。「貧乏人の子だくさん」とい

う言葉がありますが、昔も今も貧乏社会ほど人口が多く、苦しんでいます。身近に貧しい農民の暮らしを見ていた賢治は、金持ちである自分に深い罪障意識をもっていました。賢治は社会主義のイデオロギーとは別の視点から、金持ちである自分はその命を貧しい人に捧げなくてはならないと感じていたように思います。貧しい一人の青年に会った説き、「私はもし金はもうけてもうまいものは食はない。立派な家に住まない。妻をめとらない」と語ったということが手紙（大正七年五月十九日。二十二歳）の中に記されていますが、賢治にとって性の禁欲は社会的な階級コンプレックス（金持ちコンプレックス）とも深く関わっていました。③は性のエネルギーを昇華しようとして生きた賢治自身の信念が伺われます。家出したあと膨大な原稿を持ち帰った賢治は「わらしっこさえるかわりに書いたもや」と語ったと言われています。賢治は性的エネルギーを禁欲によって芸術の創造や倫理の向上に転化出来ると考えていたのではないのでしょうか。「修羅の成仏」ということは賢治の生涯と作品を解くキーワードですが、修羅のエネルギーは逆転して善へと向かうエネルギーともなります。内にどろどろした修羅を意識し、訳の分からぬ気違いじみた怒りに襲われ、健康な男としての活力にあふれていた賢治にとって、自らの内なるエネルギーをどう生かすかというのは、大きな課題だったのだと思います。

宗教的禁欲を触発するものとしてウイリアムジェームズという心理学者は清浄なるものに対する愛、贖罪の欲求、聖なる者に対する自己犠牲を挙げていますが、ここに挙げた事は、いずれも賢治が強力にもっていた観念だということは賢治の作品を見ると容易にわかるはずです。

賢治の思想のユニークな点は、宗教を性から恋愛へ、恋愛から宗教愛への段階の中に位置付けている点です。しかもそれは地上における様々な生き物の、或いは人間のレベルとして捉えている事です。人間と動物を比べてみれば、動物の方が性の本能に支配されています。それは盲目的といっても良いほどのものです。人間にとっても勿論、

性き強力な本能ですが、それを越える事もできる、少なくとも他の動物のように本能として、選択する余地のないものではなく、理性と意志の力によってコントロール出来るものですし、そこに人間の自由があるのだと思います。しかし、これはまさに人によって様々で、その多様性も人間の特徴の一つといってよいのでしょうか。即ち、「痴漢」がいる一方で、性を自らに禁じた「聖人」もいる所以です。

賢治は目に見えない天子的な存在についても、よく空想した人ですが、天子のようなレベルになると、もはや生物的な本能から最初から解放された霊的な存在です。一方、弱肉強食の本能に支配されて生きる生物もいます。賢治の詩の中の言葉を使えば、前者は「ユリア」や「ペンペル」であり、後者は「恐竜」や「爬虫類」ということになります。恐竜や爬虫類の全盛時代からそれが滅び、やがて人類が誕生するまで、そして人類の歴史の発展を考えるとそれは「大いなる一致」——愛の完成に向かって進化している。賢治はこう考えたのだと思います。それは石の採集を通じて得た、数億年の地球の歴史についての知識と何億光年のはるかかなたの光に対する感覚を育てることになった天文学の知識、そして仏教やキリスト教の永遠なるもの、無限なるものに対する感覚とが分かち難くむすびついて生まれた豊かな想像の世界でした。ですから、性に対する禁欲も単にその事だけを取り上げて考えるのではなく、賢治のスケールの大きなその世界観の中から考えてみるにはならないでしょう。それにしても賢治の文学は、性的禁欲者の、霊的な文学であると思わずにはいられないのです。賢治は結婚しないことによって、そのエネルギーを文学の創作に賭け、あれほどにも清らかな無垢なる少年のような世界を生み出すことができたのではないのでしょうか。それは現代の商業主義的な性の氾濫のなかにあつてまさに奇跡的な風景といつてよいものだと思います。一言でいうなら賢治は「性」を「聖」なる次元へ引き上げた希有な宗教文学者であつた、と私は考えています。

〔第十八回公開講座講演集、教養講座〕所収 平成十年二月発行

五、宮澤賢治と岩手医大

「身体髪膚これを父母に受く。あえて毀傷せざるは孝の初めなり」といいます。私たちの命は自分で勝手に作ったものではない。親から授かった命である。だからこれを傷つけず、慈しみ大切にしようとするのは、親孝行の始まりだということです。病氣にかからないように食べ物に気を付け、運動を生活に取り入れることは人としての務めだと思います。しかし、それでも病氣になることもありますし、いやがおうでも老いを避けるわけにはいきません。お釈迦様の「人生は苦である」という言葉は、少し悲観的に聞こえるかもしれませんが、生老病死という四苦という事実がこの人生には厳然としてあるということは否定できないことでしょう。しかし同じ事実であってもそれをどう受け止めるか、それによって苦しみの受け止め方が変わってきます。極端に言えば苦もまた楽しいということもあるかもしれません。壮年期、老年期の人生の課題として深く、豊かな死生観を育てるということも健康管理と同じくらい大切なことではないかと思います。本日は宮澤賢治と岩手医大というテーマで賢治の死生観を紹介してみたいと思います。

一、詩「岩手病院」について

昭和五三年六月八日、岩手医科大学の創立五十周年を記念して医学部正面玄関脇に「岩手病院」の詩碑が建立されました。この詩は大正三年四月盛岡中学を卒業したばかりの賢治が、肥厚性鼻炎の手術のために入院した時の体験に基づいて書かれたものです。詩を読みますと入院している患者さんたちの不安な心理や忙しく働く医師の姿、わけても暗い病院の雰囲気の中で明るくけなげに働く看護婦さん達への思慕の情が文語定型詩の形をとって巧みに

表現されています。賢治はその看護婦さんの一人に恋をしたということも他の詩を読みますとはつきり書かれています。

興味深いことにこの詩は入院体験の約二〇年後、三七歳の賢治が死を覚悟して病の床にありながら作った詩だということ。入院当時賢治は盛んに短歌を作っていました。その短歌を読み返し、その当時を思い出しながら新しく文語詩として生み出されたのがこの詩なのです。この詩だけでなく、「文語詩稿五十篇」「文語詩稿百篇」の多くはこれまでの生涯を省みる中から創作されています。詩を書きながら賢治は自分のその時、その時の体験にあらたに形を与え、自分の歩みをまとめようとしたのかも知れません。そう考えると「自分史」に似ているともいえます。しかしこの自分史なるものなかなか難解で、賢治研究がこれほど盛んなのにまだ、解き明かされていないようです。それはともかく賢治のこの例から一般化して言えば、病や老いの期間は、人生を振り返りそれに意味を与える創造の時期である、とは言えないでしょうか。何もあくせくと地位や収入のため、名声のためにのみ働くのが、生きがいではない。そのことに気付かせてくれることに病や老いの功德もありそうです。

二、科学と宗教

死を思う病の床にあつて賢治は幾度も「この自分とは何か」ということをつきつめて考えたようです。これもよくわかります。何より大事なこの自分、すべての基盤であるこの自分がなくなる、それは世界がなくなることと同じです。世界から幕を引くわけですから一切が無に帰してしまいます。多くの宗教は、無ならぬ「永遠の命」を説いています。その永遠の命を信じることによって空しさから救われる。そこに人生の終末期における宗教の果たす役割があると思います。

賢治は（一九二九年二月）と題された詩の中で、「われやがて死なん 今日又明日 新しくまたわれとは何かを

考へる」という言葉から始め、自分とは結局、法則の他の何者でもない、と言っています。体は骨や肉、分子、原子で出来ている、そうした科学的な法則の産物なのだというのです。確かにその通りで、私たちは精子と卵子が合体し、細胞分裂を繰り返して出来上がった存在であることは物質レベルでみて動かしがたい真実でしょう。

しかし賢治は、こうした科学的な法則のさらに奥に、「目に見えない法」「心や又、直感で、感じ取られる法」「法」とは真理、仏教というダルマです）が存在するということを感じていました。科学の法則は時代によって変化する（人類は常に新たな科学的法則、発見を積み重ねていくわけですから今、真実だとされたことは百年の後には誤りだったとされることは十分にありうることです）それに対して宗教の教える真実こそ永遠に変わらないものだと考えたようです。賢治は、世界を支配しているのは釈迦の慈悲の心、仏様の愛の精神だと信じていました。賢治の手紙の中に「宇宙意志」という言葉が出てきますが、「宇宙意志」なるものがあって、それがあらゆる生物を本当の幸福にもたらしたいと願っている、と考えたらしいものか、それとも世界が偶然盲目的なものか、信仰か、科学か、といった場合、私はどうしても前者だと考えざるを得ない、と書いています。「宇宙意志」とはいかにも賢治らしい言葉ですが、伝統的な宗教の言葉で言えば「仏様の慈悲」や「神様の愛」がこの世に働いているということなのです。私は狭い宗派、教義にとらわれないこの「宇宙意志」という言葉が好きです。賢治のようにこれを感じることができたならと思います。この言葉の前では、狭いあくせく悩んでいる小さな自分などふっとんてしまひそうです。もしこれを実感できたら、病氣や死もこわくなくなるかもしれません。

賢治の博愛精神、自己犠牲の心は、この目に見えざるものの愛の働きを痛烈に感じ、これに感謝し、これに応えようとするところから生まれたものでした。自分が愛されていると感じていること、お釈迦様が自分のために命を投げ出したと信じることからその利他的な行動が生まれました。

賢治はその手帳の中で、みずからに向かって「諸苦を抜くの大医王たれ」と呼びかけていますが「大医王」とは釈迦の別名で、病気の苦しみだけでなく、この人生におけるあらゆる苦しみ、貧困や不和、妬み、憎しみなど人間を苦しめている一切のものから救う存在だということです。賢治は仏の弟子として強い使命感をもっていました、それを端的に表したのがこの言葉です。ひそかに手帳に書き付けたこの言葉は賢治の生涯を解く大切な言葉だと思います。

自分の体を医学の進歩のために役立てて欲しいという皆様の志はまさに賢治の心にかなうものと言ってもよいでしょう。賢治の書いた文章の中には、「献体の心」にそのまま通じる文章もあります。賢治こそ日本の文学者で、きわめてまれな「献体の心」に生きた文学者です。

医学生達が皆様の尊い志を感じ取り、賢治からも学びつつ、人々の命を守る尊い使命を胸に刻んで欲しいものだと思います。

（本稿は岩手医科大学白寿会会報第三〇号（平成十二年）に寄せた講演の要旨である。）